

< 今日の説教のポイント ヨハネによる福音書 19 章 16 節 b ~ 27 節 >  
ヨハネを通して神様が伝えようとした十字架のメッセージを追う。

### 1 イエス様が十字架を背負われたことを強調するヨハネの意図は？

ヨハネ福音書だけがキレネ人シモンがイエス様の十字架を背負ったことを記さず、「**イエスは、自ら十字架を背負い**」(17)とだけ記しています。ヨハネはシモンが代わって背負ったことを知らなかったのではなく、一番大事なことをしっかり伝えようとしたのです。すなわち、「**イエスもまた、ご自分の血で民を聖なる者とするために、門の外で苦難に遭われたのです**」(ヘブライ 13:12)。ゴルゴタは門の外であり、それは罪を贖う捧げ物を捧げるのは門の外でという旧約の律法に則っています (レビ記 16:27)。違う点は雄牛や雄山羊ではなく、罪のないご自身を捧げて下さった点なのです！ 神様がこのことをなされたのですから、私たちにとっては驚きと共に、これ以上確かな罪の赦しはないと確信できる出来事だったので (ローマ 3:21-26、ヘブライ 13:13-16) ！

### 2 「ユダヤ人の王」にこだわるヨハネの意図は？

ヨハネはイエス様に付けられた罪状書きが「ユダヤ人の王」であったことにこだわっています。旧約聖書を熟知しているなら、すぐにイザヤ書 52 章 13 節以下の主の僕の苦難の個所が思い浮かびます。そこには、打たれて見る影もないみじめな姿で処刑される人物が実は主の僕であり、それは神様が私たちの罪を贖うための捧げ物とされた出来事であった (イザヤ書 53:10) ということが記されているのです。これがイエス様より約 500 年前に記された預言であることにまず驚かされるのですが、イエス様を言い当てている (予言的中) という事より、恵みに満ちたその内容の深さ (神様から預かった言葉、預言) にこそ、驚くべきなのです。祭司長たちはそれを全く理解できなかった (21)、そうなってはならないとヨハネは私たちに言いたかったのでしょう。

### 3 主イエスがこの時に至っても示された思いやり。今の私たちにも！

ヨハネはイエス様がこの時に至ってもなお自分のことではなく、残していく母親への思いやりを示されたことを記し加えました。この方が私たちの主であるのだから、主は私たち一人一人のことも同じように思っ下さっているのだということを私たちも覚えておきたいと思います。